

兄が死んだ日、家が狭いため寝るところがなく、わたしは兄の遺体といっしょに寝ました。兄の遺体は頭に包帯を巻かれて寝かされていました。それを見て「頭がないな」と思ったことを覚えています。

### 食べるものを求めて

わたしの家は貧しかったため、食べるものが一切なく、生きて行くのに精一杯でした。今、みなさんが送られているような生活ではなく、ただ生きていたという表現が近いと思います。当時駅前には、家を焼かれ、親を失った「戦災孤児」がたくさんいました。

家族の心がバラバラになり、家にいづらなくなったわたしは、食べていくためにそこへ行き、戦災孤児の人たちと同じようにして、闇市で人からものをいただいていた。少しでも食べものが手に入れば、みんなで分け合っていました。ものは配給制で、配給があれば並びに行き、雑炊をいただきます。戦後の動乱の時代でした。

わたしは半年程、戦災孤児にまぎれて生活をしていたため、孤児院に保護されたこともあります。孤児院では食べるものがあったため幸せでした。孤児院には半年程いましたが、父が迎えに来たため家に帰りました。

### 中学校へは行かずに働いた

戦争中は学校へ行っていました。勉強はできませんでした。まず、教科書がありませんでした。学校には置いてありましたが、児童には配られません。算数や国



「靴みがきの少年少女(大阪駅東口阪急西側歩道)」 提供：大阪歴史博物館

語などの勉強ではなく、「モールス信号」や「手旗信号」といった戦争に関することばかりを教わっていました。また、学校に登校してもすぐに空襲警報が鳴るため、学校生活自体が成り立っていませんでした。

今では小学校を出たら中学校へ行くことが義務化されていますが、わたしは孤児院から帰ってきてすぐに「丁稚奉公」へ出されました。そのため、中学校へは行っていません。

今の区民センターがある付近に当時うどん屋さんがあり、そこへ丁稚奉公に行きました。そのお金でわたしの家族は生活をしていました。奉公先がうどん屋であるため、うどんを食べさせてもらうことができました。わたしは病弱でとても12才には見えないほど背も小さかったのですが、おかげで平均程の体格になることができました。

学校生活の記憶はほとんどありません。

### 空襲の記憶

空襲の時は10才程で、記憶にはありますが言葉で表現するのはとても難しいです。当時は衛生面も悪く、わたしは病弱であったためとても苦労しました。

昭和20年のころの大阪は、毎日のようにあちこちで空襲警報が鳴っていました。空襲警報が鳴っても飛行機が飛んで来ないこともあります。わたしの住んでいた地域では空襲警報は毎日鳴っていましたが、実際に爆弾が落ちて来たことは1度だけでした。その日は1日中逃げていることを覚えています。



「火の雨のように降り注ぐ焼夷弾」 提供：ピースおおさか

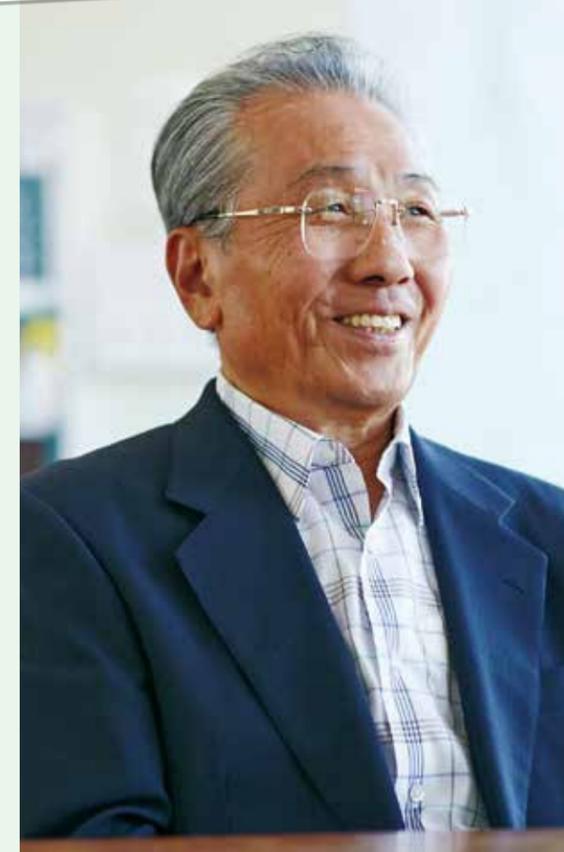
昼間の焼夷弾は、銀紙を落としたかのようにチカチカと光って真っ白になります。夜には花火のように真っ赤になって、「ザー！」ともものすごい音をさせて落ちてきます。焼夷弾がどこへ落ちるか予想できないため、とにかく逃げました。自分がどこを向いて逃げているのか見当もつかない状態でした。10才の子どもに正しい判断などできるはずもありません。周囲の大人たちが逃げる方向へ逃げました。

### 当時のお葬式

空襲の後には近所中がお葬式ばかりでした。お葬式と言っても、お坊さんにお経をあげていただくような、

お葬式はできる状態ではありませんでした。当時は今のように死者を寝かせる「寝棺」ではなく、「座棺」といって四角い箱に人を座らせて茶毘にふしていました。自分たちで座棺に入れて焼き場へ持って行きます。焼き場にはいくつもの座棺が積み上げられていました。茶毘にふすための燃料になる木を持って行かなければ、焼いてもらえないのです。そのような茶毘にもふされない座棺が積み上げられていたのです。わたしの兄もこのようにして葬ったのです。

### 戦争を知らない世代へのメッセージ



生徒さんたちは顔色がいいですね。わたしたちの時代はみんな悲壮な顔をしていました。今は平和で幸せです。この平和を守るために、みなさんには色々と考えていただきたいです。

身近なことと言えば、新聞を読んで世界や日本の情勢を知ることです。少しでも政治に興味を持っていただきたいです。だれがいい悪いではなく、関心を持って勉強して、まちがったことがあればその時に行動を起こせるような考えを持っていただきたいです。人に全て任せきりにしたり、自分は動かずに家の中にいたりするだけでは、何もチャンスはありません。ボランティアや公園の掃除、あるいはアルバイトでもいいと思いますが、少しでも行動して社会と関わり、世の中の仕組みを知っていただきたいですね。

みなさん1人1人が行動を起こせば、平和というものが見えてくると思います。